

# 山本二峯の収蔵に関する一考察

— 関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛二峯書簡を中心として —

下田章平

はじめに

本稿は日中近代書画碑帖収蔵史研究の一環として行うものであり、特に収蔵史上劃期をなす辛亥革命から第二次世界大戦終了時までの時期に活動した山本二峯（一八七〇—一九三七）の収蔵に関して検討するものである。二峯の名は悌二郎、齋号は澄懷堂・香雪書屋・蕉雪吟館・陶然居・宝宋堂・海山仙館<sup>①</sup>。新潟県出身の実業家・政治家であり、田中義一及び犬養毅内閣で農林大臣に就任している。また、山本悌二郎『澄懷堂書画目録』（以下『目録』、文求堂、一九三二）には二峯の中国書画コレクション一一七六件が記載され、その数量及び全時代の書画を網羅的に蒐集していた点においては、当時の書画碑帖収蔵家の代表格として挙げることができる。また、山本悌二郎・紀成虎一『宋元明清書画名賢詳伝』（田中慶太郎、一九二七）の凡例に見る

ように、『目録』上梓後も獲得された書画はあったが、實質的に『目録』の刊行された昭和初期にはそのコレクションが完成したものと考えてよい。このほかにも書画以外の文物、例えば、儒者物や刀剣、坂東貫山（一八八七—一九六六）から割愛された名硯・文房小品・明器・土偶の類を収蔵したが、これ以外の文物収蔵の実態は不明である。二峯は東京市上目黒五本木の二万三千坪の本邸に居住していたが、関東大震災では網屋（刀剣商）に預けていた刀剣を除き罹災を免れた<sup>②</sup>。しかし、二峯の晩年に散佚したコレクションは多く、伊藤みほの編『澄懷堂遺失書画目（稿）』（『澄懷』第一号、二〇〇〇、六七—七二頁）にそれを窺うことができる。昭和一〇年前後に二峯の側近であった猪熊信行（一九〇六—一九九二）がその一部を受け継ぎ、現在は猪熊から寄贈を受けた一般財団法人澄懷堂美術館（三重県四日市市）に継承され、一般に公開されている。ちなみ

に、昭和九年五月二日から二三日まで有恒倶楽部（大阪市）で二峯の硯と書画の展覧会が開催され、没後の昭和三年九月一七日から一八日に東京図書倶楽部で二峯旧蔵の書画関係漢籍の売立が行われている。<sup>3)</sup>

二峯の収蔵に関する先行研究としては、まず杉村邦彦「内藤湖南と山本二峯―澄懷堂収蔵の中国書画をめぐって―」（注（一）参照）が挙げられる。杉村氏は二峯の閱歴と澄懷堂に収蔵された中国書画の由来について検討した上で、内藤湖南（一八六六―一九三四）の題跋や書簡によってその鑑定や両者の交流について明らかにしている。このほかにも澄懷堂美術館紀要『澄懷』等にも断片的な言及が見られる。ここで先行研究の課題を指摘しておく。二峯の収蔵関係の一次資料は極めて少なく、令和二年六月二五日に行った井後尚久氏（澄懷堂美術館学芸員）への取材によると、澄懷堂美術館に所蔵されているのは二峯の旧蔵品のみであり、書簡等の資料は残されていないという。このような事情もあり、二峯の収蔵における交友関係や収蔵観、書画以外の文物収蔵の実態について検討されたものは従来あまり見られなかった。

そこで、本稿ではこれまで検討されてこなかった関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛二峯書簡を分析の対象とし、

上述の先行研究の課題を解決したい。本稿で当該書簡に着目したのは、杉村氏論考（上掲）にすでに言及されているように、湖南は二峯の収蔵書画の鑑定に関わった人物であるからである。その書簡には収蔵に関する内容が見られ、書簡同封の二峯の詩には、文物や二峯のコレクション形成に関わった人物を詠じたものが見られる。これらの資料はいずれも昭和初期、すなわち上述したように二峯のコレクションの完成期にあたるものであり、その優品及びコレクション形成に最も深く関与した人物が詠じられていると見ることができる。また書簡同封の二峯の詩は、二峯最後の漢詩集『蕉雪吟館詩草』（以下『詩草』、私家版、一九三三）に湖南の添削を経て掲載されたものもあるが、添削の段階で削除された収蔵に関わる有益な情報も含まれている点で本資料は収蔵史研究上の価値があるといえる。

本稿での検討によって、中国書画碑帖の日本への流入及びそのコレクション形成の一端、すなわち二峯のコレクションだけでなく、特に洋画家で昭和十一年に書道博物館を開設した中村不折（一八六六―一九四三）のコレクション形成の背景も明らかとなるだろう。また、当時の日本の中国絵画・書道史研究は、収蔵家が新たに獲得した書画碑帖によって再検討が行われてきたが、本稿での検討によって、

当時の中国絵画史研究をリードした湖南と二峯の収蔵観（絵画史観）の相違を明らかにすることができよう。なお、本稿では作品の作者は『目録』に従う。また、表記に関しては、引用文も含めて常用字体を使用し、人名は通称とし、「」には稿者が補足した語句を記した。書簡の表記や改行は統一性に欠けるものの原文のままとし、脚注は「」内に、改行は「／」で示すことにしたい。

#### 一 関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛二峯書簡

関西大学図書館内藤文庫所蔵湖南宛書簡等の目録<sup>(4)</sup>によると、湖南宛二峯書簡は一九通確認することができる。二峯が湖南に送付した年と整理番号を紀年順に整理すると、日時不明なものを除き、そのすべてが昭和初期のものであった。

- ・昭和二年 一件（八三七四）
- ・昭和三年 五件（八三一三・八三一二・八三七二・八三六一・八三六九）
- ・昭和五年 一件（八三二〇）
- ・昭和六年 五件（五六〇二・六二二七・五六九三・六一二・五六〇六）
- ・昭和七年 三件（八三五二・八三七〇・五六四四）

- ・昭和八年 二件（八三五三・五六二五）
- ・不明 二件（五六九五・六三〇三）

これらの書簡の内容に関しては、大半が漢詩の応酬、添削依頼と思われるものである（八三七四・八三二三・八三二・八三七二・八三六一・八三六九・八三二〇・五六〇二・八三五二・八三七〇・五六四四・八三三三）。このほかに、二峯のコレクション鑑賞の招待（八三七四・六二二七）、上掲『目録』序文依頼（五六九三・六八二二・五六〇六・八三三二）、『詩草』の題簽揮毫依頼（八三三三・五六二五）、白鶴美術館建設の相談（五六九五）、封筒のみで内容が不明なもの（六三〇三）がある。

上掲杉村氏論考では大正二年一二月の作である「倪文正瀟湘夜雨詩画軸跋」（『内藤湖南全集』巻一四、一九七六、筑摩書房、一六六頁）を挙げて、二峯と湖南の交友が遅くともこの頃にはすでに始まっていたと指摘されているように、関西大学図書館内藤文庫所蔵の当該書簡には時期的な偏りが見られることは否めないが、上述のように、当該書簡は二峯の収蔵を考える上では重要な資料といえよう。

#### 二 二峯の収蔵をめぐる交友関係

二峯の収蔵をめぐる交友関係に関しては、山本修之助

『山本悌二郎先生』（山本悌二郎先生顕彰会、一九六五、一  
二頁）に、

蒐集の規模は、また大変なもので、その目標は中国  
歴代名家を全部あつめようというのであった。だから、  
その鑑別にあたっては精魂を傾け、一軸を手に入れる  
ごとに、この道の大家から意見をきくことにしていた。  
東京では、大村西崖・滑川澹如・黒木欽堂・河井荃廬、  
関西では内藤湖南・長尾雨山の諸家にはかった。

と言及する。ここに挙げられた人物は、中国書画碑帖に対  
する広範で専門的な知識を持ち、作品の真贋の鑑定や鑑賞  
を担った賞鑑家として当時著名であった人物といえるが、  
二峯は上掲賞鑑家の中での人物と深い交友関係にあった  
のであろうか。ここでは、八三二〇書簡（昭和五年一月  
一日消印）同封の「懷人十律」によって検討しておこう。  
「懷人十律」は縦二四・六センチ、横三三・七センチの  
宣紙を使用して活版に附したものである。紀年は記されて  
いないが、湖南を詠じた七律を二峯が同封の詩牋に揮毫し  
ていることによって、当該書簡の差し出された昭和五年頃  
に作られたと見てよい。その内容は、二峯と交友関係にあ  
った一〇名の人物をそれぞれ七律に詠じたものである。一  
〇名とは、橋本独山（一八六九—一九三八、臨済宗の僧侶、

書画家）、小久保城南（一八六五—一九三九、名は喜七、  
政治家、漢詩人）、湖南、国分青崖（一八五七—一九四四、  
漢詩人）、長尾雨山（一八六四—一九四二、名は甲、漢詩  
人、書画家刻家、賞鑑家）、小田切銀台（一八六八—一九  
三四、名は万寿之助、外交官、銀行家、漢詩人）、江木錦  
江（一八七三—一九三二、名は翼、たすく官僚、政治家）、羅叔  
言（一八六六—一九四〇、名は振玉、学者、政治家、賞鑑  
家）、鄭蘇戡（一八六〇—一九三八、名は孝胥、官僚、政  
治家）、汪榮宝（一八七八—一九三三、外交官）である。  
後に上掲『詩草』に「懷人八首」と改題して収録され、城  
南と銀台の詩が削除されている。

「懷人十律」の中で書画碑帖の収蔵関係者として着目さ  
れるのは、湖南、雨山、羅である。いずれも前稿で指摘す  
る「犬養木堂を中心とする収蔵集団」に所属する人物であ  
り、昭和初期において二峯はこの収蔵集団と三人の賞鑑家  
を重視していたことが窺われる。次に、湖南宛二峯書簡に  
よって、二峯と湖南の収蔵をめぐる交友関係に焦点をあて  
て分析しておこう。

まず、二峯は書画金石を獲得した際には、湖南とともに  
鑑賞している。八三七四書簡（昭和二年□月二日）は消  
印がなく封書本紙に、「十二日」とあるのみであるが、同

封の詩牋六枚の一つに、「丁卯初冬」とあることによって、

昭和二年一〇月（陰曆）に差し出されたものであると判明する。また、封筒表書に「木挽町小松屋ニテ／内藤虎次郎様」とあり、湖南の上京したことを知った二峯が湖南に使者を遣わして送った書簡であると判断される。封書本紙に、

……石渠宝笈所載の徽／宗の筆五色鸚鵡図巻／手に入り居り候二付御目に／掛け度就ては明十三日晚／まで御滞在奈（な）らば同日五時／頃より弊寓にて晚餐／を共に以多（いた）し度御都合の程／電話にて御回答願上候／勿々／十二日／山本／内藤老兄

とあり、二峯は湖南と新獲の「徽宗五色鸚鵡図巻〔石渠旧藏〕」（上掲『目録』巻一所収、ボストン美術館蔵）の鑑賞に招待されている。また、八三六九書簡（昭和三年八月二六日消印）封書本紙には、

……過日劉松年の設色山水を獲得以多（いた）し候末景濂の／題詩あり確可（か）に真蹟と存じ候へ共其中機会を得て／高鑑を乞ひ可申候／湖南老兄 明後日帰京の都合に御坐候 悌拜／八月廿六日

と記され、新獲の「劉松年蜀道図立軸」（上掲『目録』巻一所収）の鑑賞を促している。「帰京」云々とあるのは、二峯が「箱根奈良屋ニテ」（封書裏書）とあるように箱根

で休養中であつたからである。

六二二七書簡（昭和六年三月一五日）には消印がなく、書簡に「三月十五日」と見えるだけである。しかし、封書本紙に、「明日者（は） 幸ひ日曜」とある記述によつて、昭和六年のものと判断される。封書表書に、「四谷区阪町五番地／小松屋旅館ル（に）て／内藤虎次郎様」とあることで、上掲八三七四書簡と同じく、湖南上京の際に手渡された書簡と見られる。封書本紙に、

……就て者（は） 明日者（は） 幸ひ日曜ル（に） 候へ者（ば） 午後二時頃与（よ）り弊／荘へ御来遊相叶ひ候者（は） ヲ／欣幸の至尔（に） 存候其後／獲得の書画金石類も／御目尔（に） 掛け御高鑑を仰／ぎ度存じ候右ハ都合下／左（さ） れ候者（は） ヲ 明日一時半頃／御迎ひの自働車差出／し可申候庭前の梅花も／綻ひ居り候折柄半日の／御清遊是非御勧め申上候／右御案内旁々御左右御伺／申上候／勿々／三月十五日／山本／内藤賢臺／侍史／博文堂主人も御同伴／可被下候と見える。新獲の「書画金石」の鑑賞及び邸内の花見を含めた清遊に誘い、原田庄左衛門（一八五五—一九三八、「博文堂主人」）の同伴も求めている。

上述のように『目録』の編纂段階において新獲書画があ

つたようであるが、これらの書簡によって昭和二年に「徽宗五色鸚鵡図卷」「石渠旧藏」、同三年に「劉松年蜀道図立軸」、同六年においても「書画金石」が獲得された状況が判明し、二峯の収集活動が昭和初期においてもなお盛んに行われていたと見られる。一方、五六九三書簡（昭和六年八月一六日消印）には、

……小生等政治家の所蔵は所詮／将来四散の運命を免れざるべきもソノ虞あればあるほど／目錄多〔だ〕けは一日も早く上版以多〔いた〕し置き度存居次第に御座候

と二峯が湖南に吐露するように、政治資金の入用により、将来的にコレクションが四散することを予期している。このことは、鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和初期における中国画コレクションの成立」<sup>(6)</sup>にも、

……お金がいくらも要るんですね、政治家つてのは。それでだんだん品物を手放すようになられた。ところが私の方は前に「政治家を」おやめなさいって何度もいつてるでしょ、だから私の方には金に換えたいっていいない。その頃、京都に田中寸紅堂というのがあって、いいものをどんどんアメリカへ持っていった。そこへ山本さんが目を付けてアメリカに向くものをずい

ぶん出された。結局、私の方が苦勞して日本へ持って来て、それを寸紅堂がアメリカへ持っていった。残念なんです、結局東洋のものを東洋に残すという、はじめの山本さんの主旨に反するようなことになってしまった。

と指摘されている。「寸紅堂」は田中常太郎（一八八五―一九三九）が早稲田大学卒業後に京都に開設した書画骨董商である。また、上掲「徽宗五色鸚鵡図卷」「石渠旧藏」<sup>(7)</sup>は清内府から恭親王を経て、昭和二年に二峯が収蔵し、昭和八年、ボストン美術館アジア部部长であった富田幸次郎（一八九〇―一九七六）がマリア・アントワネット・エヴァンズ基金を利用して、同館に購入している。このように、昭和初期において二峯は収集と散佚を短期間で繰り返していたことが判明する。

また、湖南にとつても二峯との交友関係は隠棲後の生活費を賄う上で重要であった。二峯「懐人八律」（上掲『詩草』卷一所収）第二首に、

屏居力学謝時流 屏居して力めて学び時流を謝し  
更向利名無所求 更に利名に向ひ求むる所無し  
千載興亡横眼底 千載の興亡眼底に横たへ  
千秋得失上心頭 千秋の得失心頭に上ぐ

揚門問字諸生過 門を揚げ字を問ふ諸生過りよ

任庫羅書万巻収 庫に任ふ羅書万巻収む

想像林深塵遠処 林深塵遠の処を想像せば

聘神今古独優遊 神を今古に聘して独り優遊たり

とある。この詩の第一句に「屏居」とあるように、この詩

は昭和二年八月、恭仁山荘へ隠棲した後の湖南を詠じたも

のである。首聯では湖南の学究態度、頷聯では東洋史家、

頸聯では教育者・蔵書家としての湖南の一面を詠じ、尾聯

では湖南が俗世から離れ悠々自適に隠棲するさまを活写し

ている。一方、ここに詠じられるような隠棲後の旺盛な湖

南の学究活動を支えるには、それなりの資金が必要であつ

たことは想像に難くない。五六〇六書簡（昭和六年二月

二九日消印）封書本紙に、

拝啓澄懷堂書画目錄／序文先達手御送致を蒙り／正に

到着直ちに印刷へ廻し／置き候処当時内閣交送の／間

際に非常に混雑致し／居りし為め貴方への御回答を

／井土靈山君に托し置きしに／同氏の失念にて竟に御

無沙汰／に相成り居り候趣数日前／博文堂より承り恐

縮致／し居り候次第に御座候／非薄汗顔に候へ共御礼

の／印迄に金百円也郵便／為替を以て茲許同封拜／呈

以多〔いた〕し候間御受納被下度候

とあるように、上掲『目錄』序文執筆の御礼として湖南に  
百円の為替を送付している。五六二五書簡（昭和八年七月  
二二日消印）封書本紙に、

拝啓蕉雪吟館詩草／上梓に關し御助力を辱／ふし難有

奉存候／何か謝／意を表し度存じ候へ共遠／隔の地二

て不任其意依て／甚多〔だ〕失礼に相候へ共別箋／小

為替二枚同封以多〔いた〕し候間御笑納被下度候

と記し、上掲『詩草』上梓への協力に対して、二峯は「為

替二枚」の謝礼を送付している。また、上掲五六〇六書簡

では謝礼を含めた序文受領の連絡が二峯からなく、湖南が

博文堂に照会を依頼したものと推定される。「犬養木堂を

中心とする収蔵集団」の事務局として活動した博文堂につ

いて、上掲前稿では「……この収蔵集団が収蔵にまつわる

リスクを事前に回避し、収蔵活動を円滑に行うために、収

蔵家と賞鑑家の間の連絡・調整の一切を執り行う」役割を

担っていたことを指摘したが、このことを示す証左といえ

る。ただし、上述のように、二峯は漢詩の応酬や添削を通

じて湖南と密接に交流していたために、同集団の他の収蔵

家とは異なり、湖南に直接送金したり、自身のコレクショ

ン鑑賞に招待したのであろう。

### 三 二峯の收藏観と文物コレクシヨン

上掲八三七四書簡には七絶六首が同封され、そのうち五首が「次湖南先生見似五首韻却呈併記憶」と題して二峯のコレクシヨンが詠じられ、詩の割注には二峯の收藏に関わる重要な情報が記されている。そして、これらの詩は上掲『詩草』巻二に採録される段階で改作され、「偶興次内藤湖南韻」の題下に、二首を減じて三首が収められている。上述のように、これらは昭和二年の作であり、実質的に二峯のコレクシヨンが完成した時期にあたる。ゆえに、二峯がその中で優品と選定したものが詠じられており、二峯の收藏観が反映されている。すなわち、二峯の詩では専ら宋元画（五代を含む）を題材としているため、二峯がコレクシヨンの中でそれを重視していたと見ることが出来る。「偶興次内藤湖南韻」第二首（上掲『詩草』巻二所収）に、

不問囊中錢有無 問はず囊中錢の有るや無<sup>いな</sup>やを  
退朝沽醉倚庭梧 退朝 沽醉し庭梧に倚る  
秋深木落園林寂 秋深く木落ち園林寂しく  
断雁孤亭想画図 断雁 孤亭 画図を想ふ

とある。この詩の削除された割注（上掲八二二四書簡所収）に、「錫秋園有孤亭。名「迷愚廬」。吾淹息処也。」（錫

秋園に孤亭有り。「迷愚廬」と名づく。吾が淹息の処なり。）とあり、二峯の邸宅の庭である「錫秋園」にある「孤亭」と、倪瓚（一三〇一—一三七四）「断雁孤亭図」（第三首割注参照）を掛けている。本図は上掲『目録』に見えないため委細は不明である。続いて、第三首（上掲『詩草』巻二所収）に、

形役勞勞老世途 形役して勞勞として世途に老い  
白頭難耐画雄図 白頭耐へ難きも雄図を画る  
他時吾亦追荆浩 他時吾も亦た荆浩を追ひ  
欲縱清流濯足娛 清流に足を濯ふの娛しみを縦にせん  
と欲す

とあり、割注に、「倪雲林「断雁孤亭図」、荆浩「濯足図」、共係吾家藏弃。」（倪雲林「断雁孤亭図」、荆浩「濯足図」、共に吾が家の藏弃に係る。）とある。「濯足」は「五代人画濯足図立軸」（上掲『目録』巻一所収）を指し、羅振玉『南宗衣鉢』巻一（博文堂合資会社、一九一六）の目録に、「濯足図立幀」無款。今定為荆浩。上虞羅氏雪堂藏。（款無し。今定めて荆浩と為す。上虞羅氏雪堂の藏。）とある。ゆえに、該図は羅を経て二峯にもたらされたものである。また、この詩では該図と「濯足」の典拠である『楚辞』の「漁父辞」を掛けている。なお、削除された割注（八三七



四書簡所収)では「家藏宋人画濯足図」(宋人画濯足図を家藏す。)とするが、湖南の指導を得て詩及び割注でも後梁(五代)の荆浩を作者とするように改められており、湖南の羅に対する敬慕の念を窺うことができる。また、次の一首(上掲『詩草』未収録、八三七四書簡所収)に、

鑑画難分雄与雌 画を鑑るに雄と雌とを分かち難く

学書還笑莫宗師 書を学ぶに還た宗師莫きを笑ふ

澄懷堂上焚香読 澄懷堂上香を焚きて読む

一幅無声北苑詩 一幅声無き北苑の詩

「董源」雲壑松風図、曩在羅氏雪堂。今帰余澄懷堂  
「董源」雲壑松風図、曩に羅氏雪堂に在り。今余の澄懷堂に帰す。」

とある。「雌雄」は優劣、「無声北苑詩」で董源(北苑とも、?—九六二)の「董源雲壑松風図立軸」[石渠旧蔵]「(上掲『目録』巻一所収)を指す。上掲『南宗衣鉢』跋尾巻一に「董北苑雲壑松風図」[上虞羅氏雪堂蔵]とあり、該図も羅を経て二峯にもたらされたものである。

このほかにも、時期が不明であるが「公暇家居觀黃公望江山勝覽図」(上掲『詩草』巻一所収)があり、これは「黃公望江山勝覽図卷」[石渠旧蔵]「(上掲『目録』巻二所収)を詠じたものである。上掲『目録』によると、至正戊

子(八年、一三四八)の黃公望(一二六九—一三五四)の自跋が見えるという。また、「許道寧雪山樓觀図李唐山莊琴棋図同時帰吾有賦此紀喜」(上掲『詩草』巻二所収)に、

道甯筆墨拔時流 道甯の筆墨時流を抜き

晞古丹青無匹儔 晞古の丹青匹儔無し

夏壑煙嵐冬嶂雪 夏壑の煙嵐冬嶂の雪

一時入我讀書樓 一時我が讀書樓に入る

とあるように、許道寧と李唐(字は晞古)の二巻を同時に入手したことを二峯は喜んでゐる。前者は「許道寧雪山樓觀図縦軸」[宣和旧物]「(上掲『目録』巻一所収、大阪市立美術館蔵)、後者は「李唐水莊琴棋図立軸」(同前、藤井斉成会有鄰館蔵)を指す。

さて、上掲『目録』を通覧すると、二峯は全時代の書画を網羅的に収集していたことは明らかである。上掲『目録』の自序に、

……上は漢魏六朝の断簡零墨、下は唐宋の名公巨卿、元の王呉倪黄、明の文沈唐仇より清の四王呉恽湯戴の諸大家に迫ぶまで、歴代大小の名蹟妙墨、一々年次を逐ひ、系統に従つて解説を加へ、稿を大正甲子初春に起して今茲新秋を以て筆を擱するに至れり。

と記されるように、系統的な収集にも心がけ、まさに二峯

一代で通史を構築するような態度で収集していたことが窺われる。一方、二峯の文物を詠じた詩を見ると、宋元画（五代を含む）を重視していることが明白であり、このことは上掲「宝宋堂」の齋号に象徴的に表されている。

大正時代までは江戸時代以前に日本に流入した「古渡」が重視されていた。北宋の山水画や元末四大家の作品はそれには見られないものであり、久世夏奈子氏によると、「新渡」（明治時代以後に日本に流入したもの）の評価が定まったのは昭和五年前後という。ゆえに、古渡と新渡の評価が二分していた時期に、二峯は新渡の宋元画を積極的に収集し、宋元画の再評価を試みていたと判断される。また、同じ頃、中国絵画史研究をリードしていた湖南は周囲の收藏家が収集した新渡の絵画を基準作品とし、董其昌（一五五—一六三六）が提唱し、清内府や高官の収集の背景にあった「南北宗論」（尚南貶北論）に基づいて中国絵画を再評価し、その成果は没後に内藤虎次郎『支那絵画史』（弘文堂書房、一九三八）として整理された。<sup>10</sup>一方、二峯が詩や書簡に取り上げた画人を見ると、荆浩・許道寧・董源・倪瓚・黄公望といった南宋正統絵画の流れを汲むものから、李唐や劉松年といった北宋画の流れに当たるものも収集している。よって、二峯は湖南に自身のコレクション

の鑑定を依頼はしていたが、湖南の主張の背景にある「南北宗論」のみに囚われずに、自らの審美眼によって宋元画を収集・再評価を試みていたといえよう。

つづいて、二峯の文物コレクションについて検討してきた。上掲杉村氏論考（二〇頁）に、「……また二峯は、中国の「金石」をも集めた」と自ら記すが、例えば殷周の青銅器や漢魏以後の石刻、あるいはそれらの拓本や法帖を収集していたという記録はなく、もとより現物も伝わっていないので、真相は明らかでない。」と述べられているが、二峯は文物の優品も収蔵していたと見られる。「偶興次内藤湖南韻」（上掲『詩草』卷二所収）第一首に、  
松風泉韻滌塵襟 松風泉韻塵襟を滌とぎひ  
此処不聽環珮音 此処には聴かず環珮の音  
鐘鼎両三書万卷 鐘鼎両三書万卷  
壁間亦挂一張琴 壁間亦た挂く一張の琴  
とあるように、鐘鼎・漢籍・琴も蒐集していたことが窺われる。具体的には、この詩の削除された割注（上掲八二七四書簡所収）に、「端陶齋克鼎、陳簠齋取唐盤、宋元版古本數卷、澄懷堂珍什也。」（端陶齋克鼎、陳簠齋取唐盤、宋元版古本數卷、澄懷堂の珍什なり。）と見える。前者の端方（号は陶齋、一八六一—一九一一）旧蔵の「克鼎」は一

般に「大克鼎」（上海博物館所蔵）に対して「小克鼎」と称される。「小克鼎」は七種あり、そのうち四種は中国の所蔵機関に、三種は日本に伝わり、藤井斉成会有鄰館、黒川古文化研究所、台東区立書道博物館に所蔵されており、<sup>(1)</sup> 端方・二峯を経て、上掲三機関のいずれかに所蔵されたものと考えられる。後者の「取膚盤」（「取膚盤」は呉式芬（一七九六—一八五〇）・陳介祺（一八一三—一八八四）を経て二峯の所蔵となった。<sup>(12)</sup> また、次の一首（上掲『詩草』未収録、八三七四書簡所収）に、

白髮垂肩懶自梳 白髮肩に垂れて自ら梳くをも懶く  
怡情漢魏六朝書 情を漢魏六朝の書に怡ばしむ  
時流頻遂新奇去 時流頻りに新奇に逐ひて去くも  
吾与古人同処居 吾と古人とは処居を同じくす

とあり、その割注に「余蔵漢魏断石数件、北魏正始元年高洛周造象碑、其尤也。又六朝人書十数卷、係敦煌出窟「文選」一卷、最珍。」（余の蔵する漢魏断石数件、北魏正始元年の高洛周造象碑は、其の尤なり。又た六朝人の書十数卷、敦煌出窟に係る「文選」一卷は、最も珍なり。）と見える。この記載によって、二峯が漢魏の断石を数件、六朝人の書を十数巻収蔵し、とりわけ北魏「高洛周造象碑」（五〇四、台東区立書道博物館蔵）と「文選弁明論」（重要文化財、

上野家蔵）が優品であったことが判明する。前者は端方『陶齋藏石記』卷六に、「高洛周七十人等造象碑」、「書道博物館藏金石拓本目錄（七）」（『書苑』第三卷第八号、一九三九、七九頁）に、「高洛周等造象 正書 正始元年三月原石本館藏 全拓条幅」と記されており、端方・二峯を経て、不折（上掲）に伝えられたことがわかる。また、後者は「燉煌石室文選弁明論卷」（上掲『目錄』卷一所収）を指す。赤尾榮慶氏は本巻の軸として用いられた不折の跋文を掲載し、上野家への入手経路は不明とするが、上掲『目錄』卷一と不折跋文の内容が一致するため、二峯・不折を経て上野家に収蔵されたものと考えられる。<sup>(13)</sup> このほかにも、「獲祁多佳手刻銅印志喜」（上掲『詩草』卷一所収）によると、二峯は明末清初の祁多佳（天啓七年（一六二七）の举人）の銅印（本文に「以義為利」、側款に「祁多佳」と刻す）を収蔵していたようである。

このように、二峯は刀剣・書画・文房具以外にも、金石・印章・漢籍・琴のコレクションがあることが明らかとなった。特に「高洛周造象碑」や「文選弁明論」は二峯から不折に伝わっており、端方旧蔵の「小克鼎」もその可能性があろう。以上の検討によって、これまで入手経路があまり検討されてこなかった不折のコレクションには、少な

からず二峯由来のものが存在することが明らかとなった。

### おわりに

本稿ではこれまで検討の対象とされてこなかった関西大  
学図書館内藤文庫所蔵湖南苑二峯書簡を分析の対象とし、  
二峯の収蔵における交友関係、収蔵観、文物コレクション  
の実相について検討した。検討の結果、二峯は収蔵におけ  
る交友関係の中で昭和初期に湖南、雨山、羅を重視し、特  
に二峯は湖南と漢詩の応酬や添削を受け、自身のコレクシ  
ョンの鑑賞に招待する一方で、湖南の学究活動を支えてい  
たことが明らかとなった。また、二峯は網羅的・系統的な  
書画の収集を行う一方で、新渡の宋元画を積極的に収蔵し  
て「宝宋堂」と号し、宋元画の価値判断が分かれる時期に  
あって、湖南の「南北宗論」を尊重した鑑定だけに依拠す  
るのではなく、自らの審美眼によってその再評価を試みた  
ものと判断した。そして、二峯には刀剣・書画・文房具以  
外にも金石・印章・漢籍・琴のコレクションがあり、その  
一部は不折のコレクションに継承されたことが判明した。  
なお、今回取り上げた資料の中には、書や明清画に対して  
は全く言及が見られない。この点に関しては別の資料を用  
いて今後の検討課題としたい。

### 注

- (1) 齋号の典拠は下記の通りである。澄懷堂は杉村邦彦「内藤湖南と山本二峯―澄懷堂収蔵の中国書画をめぐって―」(『書学道史研究』第六号、一九九六、一七―三六頁。杉村邦彦『墨林談叢』(柳原書店、一九九八、三四七―三九三頁)に増補改訂版所収)、香雪書屋は上掲『目録』二峯自序、蕉雪吟館は上掲『詩草』、陶然居は五六二・五・八三六―一書簡の封緘の際に押された「陶然居」朱文楮印(最大縦四・五センチ×横二センチ)、宝宋堂は「二峯先生藏硯宝宋堂書画展観目録」(一九三四、主催者は江藤壽雄(長安荘)と井上清一(晩翠軒)、海山仙館は「海山僊館偶得」(上掲『詩草』卷一)による。また、以下、二峯の閲歴と収蔵に関しては、本文掲載のもの以外に、二峰先生小伝編纂会編『山本二峰先生小伝』(同会、一九四二)、猪熊信行「澄懷堂書画目録のこと―二峰先生のこと」(『書道芸術』月報二〇(第一〇巻附録)、中央公論社、七八頁)などがある。
- (2) 国華俱樂部編『罹災美術品目録』(私家版、一九三三、二四〇―二四二頁)参照。
- (3) 前掲注(1)「二峯先生藏硯宝宋堂書画展観目録」、『支那典籍書画著録印譜名家詩集法帖展観入札目録』(一九三八、『反町茂雄収集古書販売目録精選集』第八卷、昭和十三年六月―十四年四月四日、ゆまに書房、二〇〇〇、五五―八四頁)所収)参照。

- (4) 「関西大学学術リポジトリ」に、「関西大学所蔵内藤文庫17・湖南宛書簡」(関西大学図書館、二〇一三)が電子データで公開されている(令和三年二月一日閲覧・印刷)。  
<http://hdl.handle.net/10112/10443> 参照。
- (5) 拙稿「中国書画碑帖の日本流入に関する一考察―収蔵家・菊池惺堂を起点として」(『日本中国学会報』第七一集、二〇一九、一八七―二〇〇頁) 参照。
- (6) 『日中国交正常化20周年記念「中国明清名画展」(財団法人日中友好会館、一九九二、頁数無記載) 参照。
- (7) 寸紅堂は、杉村邦彦「内藤湖南における学問研究と書法創作との関係―『玉石雜陳』を手がかりとして」(『湖南』第三八号、二〇一八、二〇―二九頁) 参照。
- (8) そうこう美術館編『ボストン美術館の至宝 中国宋元画名品展図録』(同館、一九九六、一〇・一三三頁)、ボストン美術館他編『ボストン美術館の至宝展―東西の名品珠玉のコレクション』(朝日新聞社、二〇一七、五七頁) 参照。
- (9) 拙稿「顔世清の来日と中国書画の日本への将来―顔氏寒木堂書画展覧会を中心として」(『中国近現代文化研究』第一八号、二〇一七、七三―九五頁)、久世夏奈子「『国華』に見る古渡の中国絵画―近代日本における「宋元画」と文人画評価の成立―」(『日本研究』第四七集、二〇一三、五三―一〇八頁) 参照。
- (10) 曾布川寛「解説」(内藤湖南『支那絵画史』、筑摩書房、二〇〇二、四五―四六三頁) 参照。

- (11) 進藤英幸「中国周代青銅器とその銘文研究―小克鼎管見―」(『明治大学人文科学研究所紀要』通号四〇、一九九六、一一―一九頁) 参照。なお、端方『陶齋吉金録』巻一には三種が記されている。

- (12) 王国維『三代秦漢金文簠錄表』巻六(芸文印書館、一九九六) 参照。

- (13) 赤尾栄慶「12重要文化財文選弁論論一卷」解説(京都国立博物館編『特別展覧会』上野コレクション寄贈50周年記念筆墨精神 中国書画の世界、朝日新聞社、二〇一一、一八二頁) による。なお、上掲『目録』巻一にある「文選巻第二十五」は「第二十七」の誤りである。

#### 附記

本稿は主に二〇二〇年度の関西大学図書館における調査研究に基づく。同館に感謝申し上げたい。また、井後尚久氏・菅野智明氏後藤秋正氏に御教示を賜った。記して御礼申し上げたい。本稿はJSPS科研費一九K〇〇二〇一による成果の一部である。

#### 追記

本稿提出後、邱吉「山本悌二郎のコレクションとその交友―内藤文庫所蔵の未刊書簡を手掛かりに」(『東アジア文化交渉研究』一四、二〇二一年三月三十一日、四四九―四五九頁) が刊行されたが論旨は異なる。当該論文もあわせて参照されたい。

(相模女子大学)